
グラスハート・ボーイ & プロミネンス・ママ

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラスハート・ボーイ&プロミネンス・ママ

【ノード】

N0072N

【作者名】

麻栗留音

【あらすじ】

腰の痛み止めの薬の副作用で、クラクラする意識の中で書いた駄菓子ですので、支離滅裂です。それを踏まえて、炭酸飲料と一緒に、口をフレッシュにしながら食べて下さい。支離滅裂はそつやつて処理して下さい。

「お兄さんっ！」の後遊ぶ場所決まってんすか？！うち、女の子にめつけや自信あるんすよ！最初は2時間飲み放題4000円なんですか？！3000円で良いっすよ！マジ、女の子はこの界隈で一番だって自信ありますよ…！」

キヤバの密引きの、コーンロウのイカれたレゲエ歌手みたいなあんちゃんを無愛想にかわして、僕は路地裏の雑居ビルへ向かっている。僕の目指す目的地へは、この中途半端な歓楽街の、特に水商売が密集した路地を越えなければならない。道幅が狭い上にたくさんの高級車が露骨に路駐され、そこをジグザグに通り抜けてゆく過程で、越冬中のカOMEMシの様に要所で群がる密引きのあんちゃんも上手くかわしていかないとならない。物凄く億劫だが、業に入は業に従えであり、悠久の歴史が中途半端にある「歓楽街」のルールは乱してはならない。

でも、やっぱりウザい。

「シャチョーサン！イイコト10000円ンダヨ。1000円ン！ペロペロ、シロシゴバリウマイヨ。1000円ンデダイジョブ。サービスマントンスルヨ。1000円、スグデキルヨ！」

国籍不明の、スタートレックの特殊メイクみたいな化粧をした年齢不詳の女も、この道程でわんさと声を掛けて来る。本当に昆虫の様に。僕は手を大仏様のポージングにして、はつきり「NO」とだけ言う。お互い、無駄な交渉はしない方が良い。僕は「見込み無し」の通行人だ。それは身なりで解るはずなんだ。高級スーツも腕時計もしていない。取り巻きも居ない。薄汚れたパーカーに皺だらけのキヤップ姿の若造が、絶対にシャチョーサンなわけ無い。例外はあ

るかもしれないが、良く人を見て物を言えよ、つて歩きながら心で喝を入れる。あくまでも、心で。

そんなイタチゴッコの行程を経て、僕は「いかにも」な雰囲気の雑居ビルに辿り着き、意味不明な異臭のこびり着いた狭いエレベーターに乗り込む。勿論、階層表示に店舗の表記など書いていない。一般的に「怖くて入れない」併まいのこの雑居ビルには、僕の生きる糧が人知れず、光を逃れ存在しているのだった。そう、全く持つて人知れず、に。

僕は、オイルや金属のカスでみすぼらしく汚れた白いパークーのポケットに両手を突っ込み、様々な臭いが渾然一体になつた、急激な吐き気をもよおすエレベーター内で、ただ、上がってゆく光る数字を見つめる。

僕は6階で降りる。6階以外に何がこのビルに入っているのかなんて知らないし、知るのも恐ろしい。何かを知る事には責任が発生するから、僕は余計な責任なんか負いたくないし、面倒な事は一切御免被りたい。幸い、初めてこのエレベーターに乗った時から現在まで、他人と相乗りになつた事が一度も無いのが救いだ。…それも不気味な事だが、人間嫌いな僕には都合が良い。非常に都合が良い。

1から6まで数字が上がつてゆくのを、僕はただぼーっと見つめる。この空間でやる事はそれぐらいしかない。エレベーターの中で楽しく過ごす方法なんて誰も考えない。ただ、上がる数字を皆で見つめる。同じ方向を、一丸となつて見つめる。世界の人々がエレベーターの中と同じ様に、平和に向かつて同じ方向を一丸となつて見つめられれば、悲劇的な現実は変わる筈だ。エレベーター内では出来るのに、星の上では何故か、出来ない。

僅かだが無限に感じない事も無い空虚の時を過ぎ、何処の会社が造つたのか解らない異様に音の大きな狭いエレベーターの扉が、壊れるんじやないかと不安になる程の異音を上げて開かれる。

僕の生きる糧が、チーク材の西洋風な扉を静かに構え、唐突に目の前に現れる。

僕はポケットに突っ込んでいた両手を右手だけ出して、縁青で処理された蒼い銅製のドアノブを下げる、前に向かって静かに扉を開く。クレ556を鎌にスプレーしなくなるなつてムラムラする、「ギイーッ」と軋む鋸びた金属音が狭いフロアに鳴り響き、僕の目の前に椅子が3つしかないカウンターと、その異常に狭いカウンターの向こうで既にレーズンバターを作っているママが姿を見せる。

もう5年近く通っているはずなのに、その素性の一切わからぬママは、メーテルが着ている黒のコートみたいなフワフワの服を身に纏つて、ロックアイスの上に金太郎飴みたいなレーズンバターを綺麗に切り揃えている。そして手を止めて、入店した僕の方へ視線を投げ掛けると、未だ底知れなく真意の解らない微笑みを浮かべて、初めてこの店にやつて来た時から一切変わらない来客の挨拶を、今日も変わらず僕に言い放つのだ。

「来る頃だと思つたよ。レーズンバターね？」

初めて来た瞬間からレーズンバターだった。でも僕はレーズンバターで良くて、レーズンバターでしか有り得なかつた。

「うん！ レーズンバター！」、僕は心で、あくまで心でそう元気良く、小学男子のそれに似た返事を返し、黙つて3つある席の左端に座る。真ん中は落ち着かないし、右端だと壁が邪魔で利き手の右手の自由に億劫さがある。僕は絶対、左端なんだ。左端が開いてないと帰る。でも初めて来店した時から、この店で他の客と相席した事が1度も無い。異様に不気味な事実だが、5年も経つと差ほど気になる事実では無くなるのだから、環境への慣れとは恐ろしく、そして奥深い。

ダマスカス鋼の様な波打つ模様の木材を使つたやたら重い椅子を引き、僕は沈黙を保ち席に着く。するとママの、フワフワのリアルファーなのかママの表皮なのか全くわからない、黒い腕が目の前の力ウンターに伸びてきて、スワロスキーロックグラスに注がれた「はちみつレモン」が、透き通る氷を溶かして心地好い音を奏でる。

「特別甘く作ったよ。はちみつもいつもより甘いよ。レーズンバタ一ね。」

黙つてテーブルを見つめる、キヤップを目が見えるか見えないかまで深く被つた僕の目の前に、お通しのレーズンバターが優しくも妖しく、妖艶に置かれた。丸く切られた濃厚なバターが、小さくも芳醇なレーズンに母なるコーティングしている。奇跡のセッション、そして魅惑のコラボレーション。

キラキラと輝く「はちみつレモン」と、その隣に置かれた宇宙船の様な見た目のレーズンバターに、僕の心の奥底から何か得体の知れない「者」が込み上がつて来る。僕自身もコントロール出来ない、僕であつて僕で無い、「者」。日常で決して出現しない、此処でしか出合えない、僕であつて僕で無い、本当の「僕」。

「今日の星はどうだった?」

メーテルの服を着た「ママ」と呼ばれる宇宙意思が、僕に向かつてモナリザの様な、天使と悪魔が混在した無限に広がる微笑を振り向ける。

僕の心がバーストする。オーストラリアのアスファルトを100%以上スピードを出して走り、熱で破裂したタイヤの様にバスンッと弾ける。

僕は勢い良く、創世記の星の様に黄金色に輝く「はちみつレモン」を飲み干して、未知との遭遇で人類の目の前に降臨した母艦の如き様相のレーズンバターを、至つて普通の「つまりようじ」でかつ攫う

よつに喰らへ、やして、滅多に開かない口からそれ以上に滅多に発さない言葉といつ空氣振動をぶつ放す。

トミーガンで銀行を急襲した、禁酒法時代のギャングの様に。ブラックホールに装備された、地上を焦土と化すミニガンの、それの様に。或いは、この星のカンブリアビッグバンの様に。要は、爆発的に。

わつ、生きる糧の時間、満喫しますよ。

「もうやだつーせだやだやだつーかなしこじといこことばっかりだ、じのほしつー！しればしむめど、もうひ、やだやだやだあーつーあのねつ、あのねつ、きゅうねつ、またねつ、ちこさいおんなのじがでかいおとこじんぼうせられてねつ、そのとなりでわかいおんなのひじがおじこぢやんのくびをしめてねつ、おどりせんはおかあさんををじつり…、おかあさんをけつけおとこのこをおもいつきりぶつてつ…、おとこのこはおとつせんのあたまをかたいバツでなぐつてつ…、おんのこはじぶんのくびをきつてつ…、そんなへんなことがもつり、ふつうになつてゐんだよつーおかしいよつ…、こんなのによつ…、こんなほしないよつーこんなつ、こんなくるつたほしでわらつてるチキュージンつてつ、やつぱりくるつてゐよつー5000ねんたつてもやつてゐること、せんせんかわらないんだよつ、おかしいよつーおかしいよつーあーもうコキヨーにかえりたいつ。こんなほしゃだつ。べつのまじこはいればよかつたつ…。ちくしょいつ、ちくしょおおおつ…」

「はー。おかわりね。」

僕は5000年前から、故郷のグラスハート星雲³¹¹より宇宙災害復興支援で派遣されている業者。この星は、チキュージンの存在で宇宙創世記の中でも散々たる悲劇から一向に復興出来ずには在る。

悲劇の連鎖が、使命感と自身のアイデンティティに燃えて、目を輝かせながら降り立つた5000年前の僕の前で、ずっとずっと飽きる事なくうんざりする程、続いている。今も変わらず。2000年、四苦八苦した。2000年、現状に耐えた。1000年前から、僕の心は完璧にやさぐれた。何を言つてもこの星はなんも変わらん。良い加減、疲れちゃったよ。

バーストした僕の前に、おかわりの「はちみつレモン」が置かれた。5000年前のこの星の、アルプスの切り立った山々に似ているロツクアイスが、金色に輝く液体の光を吸収して光る。

「今日も荒れてるね。…たまにはアタシの話しありよっか?」

僕は思わず目を見開いて、カウンターの向こうで肩肘を着き、僕を微笑みながらただ見つめるママの言葉に耳を疑つた。こんな事は初めてだつた。

何故、どうして今日なのか、理由が解らなかつた。呆気に取られる程に突然で、息着く間も無い唐突だつたが、良く思い返せば僕がこの星に降り立つたあの日から、宇宙史を変える衝撃的な出来事はいつもこんな感じに、5年間全く素性を話さなかつたママが全く理由無く突然に、自分の話しありをし始めたのと同じ様に起こつて來たのだ。ママはいつの間にか自分用のアレキサンド・ライトを作つていた。ナツメグを七味唐辛子のように大量に振り掛けた、ママ専用スペシャルで、僕には呑みこなせない酒だつた。つか、僕は酒を呑んだら破壊生命体に変化するグラスハート星人であるから、飲んだら最期。この星の最期だ。

「アタシね。この銀河系担当の、赤色巨星の変異体なの。アタシの正体、太陽なんだ。夜だけこの店開いてるんだよ。内緒ね。」

大量のナツメグで表面が見えないアレキサンド・ライトに口を付け、ママは衝撃の事実をスナックの様に打ち明けた。「冗談だと思う。きっと[冗談だと、思う。僕はしばらく田の前でクソ不味いカクテルを美味しそうに飲み干すママを、言葉のビッグバンがぴたりと止んだ、あんぐり開かれた口のまま、呆然と見つめた。

ママの髪の毛が、風も無いのに揺らいでいた。

見間違いで無いと感覚で解り、僕はモナリザの様に微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072z/>

グラスハート・ボーイ & プロミネンス・ママ

2011年11月30日16時46分発行